

コルシカ語諸方言における子音弱化について

渡 邊 淳 也

1. はじめに

本稿の目的は、コルシカ語の諸方言における子音弱化 (*lenizione cunsunantica*) について、一般的な記述を確認したあと、『新コルシカ言語地図』(*Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 略称 NALC) に掲載されているいくつかの地図を参照して、実態に即した検討をおこなうことである。

2. 子音弱化と子音交替

「子音弱化」(*lenizione cunsunantica*) という用語にはふたつの意味がある。ひとつは通時的な現象であり、ラテン語から現代ロマンス諸語にいたる歴史に沿って、二重子音が単子音になったり、閉鎖音が摩擦音や接近音になったり、無声音が有声音になったり、ついには消滅するなど、子音の調音が弛緩してきた変化をさす。¹⁾ もうひとつは現代コルシカ語で、同じ語や形態素にふくまれる語彙的基底をなす子音が、語句のなかでおかれる位置によってことなる実現形をもつ現象のことをいう。とくに後者のみに限定して言及するときは「子音交替」(*mutazione cunsunantica* または *scunsunatura*) という。

通時的弱化について小林 (2019, p.194) から例を借りると、ラテン語 *IOCĀRE* (古典語形は *IOCĀRĪ*) の後裔は、ポルトガル語 *jogar*、スペイン語 *jugar*、カタルーニャ語 *jugar*、フランス語 *jouer*、イタリア語 *giocare*、ルーマニア語 *juca* となっている。西方にある前四者はラテン語の子音 /k/ が /g/ に、または無音に弱まっているのに対し、東方にある後二者は /k/ のまま保たれている。このようなことから、閉鎖子音の弱化は西ロマンス語を特徴づける現象であるといわれ、西ロマンス語と東ロマンス語をわける特徴のひとつとされる。ところで、周知のように、西ロマンス語と東ロマンス語の境界はイタリア半島の途中にあり (La Spezia–Limini 線)、北イタリアは西ロマンス語の圏域である。コルシカは13世紀から18世紀までジェノヴァの支配を受けていたので、コルシカ語の子音弱化の要因としてジェノヴァの影響を想起するかもしれない。しかし、コルシカ語がジェノヴァのリグーリア方言からうけた影響はきわめて限定的であり、その痕跡は点在している程度である。²⁾

つぎに、共時的な子音交替は、ある語や形態素の語彙的な基底形をなす子音が、語句のなかで占める位置に応じてことなる音声的实现をもつという現象である。休止 (書記的には句読点) のあと、子音のあと、語末に強勢がおかれる語 (*parole mozze*) のあとが「強い位置」であり、それ以外は「弱い位置」である。強い位置での実現形を「強形」(*realizzazione preta*)、弱い位置での実現形を「弱形」(*realizzazione frolla*) という。Dalbera-Stefanaggi (2002, p.123) に出ている例を用いて説明しよう。*trè pani* 「3 個のパン」では、[tr'ɛ] という語末に強勢がおかれる語のあとに *pani* [p'ani] (*pane* [p'ane] 「パン」の複数形) が来ているので、強い位置ということになり、[tr'ɛp(p)ani] と強形が出る。³⁾ それに対して、

upane「定冠詞+パン」では、[u] という無強勢母音のあとなので、「弱い位置」である。このため子音が弱化し、[ub'ane] となる。こうした音の変化にかかわらず、問題の子音のつづり字は p のままにしておく。このことは、異なる音声的実現が、同一の音素 /p/ の異音 (allofoni) と見なされているということでもある。そして、語が位置によってつづり字を変えないことにより、その語の語彙としての同一性が保たれ、さらには、弱化が多い変種と少ない変種のあいだにある方言差を吸収でき、(とくに書いたときの) 意思疎通が容易になる。強い位置、弱い位置を通して、一貫して p と書くことこそ、多規範的言語 (lingua pulinomică) ⁴⁾ であるコルシカ語の抽象的なまとまりを保証しているのである。

3. 南北二分法によるコルシカ語子音交替の記述

以下では、コルシカ語の子音交替について一般的になされる記述を確認する。コルシカ語では、子音交替を通して基底形をおなじくする子音のつづり字を不変としていることから、以下、便宜的に、子音字と関連づけて提示する。強形・弱形をもつ子音字を「交替子音字」(cambiarine) という。どの子音字が交替子音字であるかは方言によってことなる。その方言差は、北部方言、南部方言の二分法によって記述される。以下、渡邊 (2017, pp.7-9) でおこなった記述をもとにして、一部を修正・増補して述べる。⁵⁾ まず交替子音字の一覧表をかかげる。

表 1：交替子音字一覧表

書記素 (grafemu)	強形 / 例 (名詞)	弱形 / 例 (定冠詞+名詞)
b	[b] / bancu [b'ãŋku] 「ベンチ」	[w] / u bancu [uw'ãŋku]
c (+a, o, u) 南 , ch (+e, i)	[k] / casa [k'aza] 「家」, chimica [k'imiga] 「化学」	[g] / a casa [aɡ'aza], a chimica [aɡ'imiga]
c (+e, i)	[tʃ] / cena [tʃ'ena] 「夕食」	[dʒ] / a cena [adʒ'ena]
chj 南	[c] / chjostru [c'ostru] 「修道院」	[j] / u cjhostru [uj'ostru]
d	[d] / donna [d'onna] 「女」	無音 / a donna [a'onna]
f 南	[f] / fine [f'ine] 「終わり」	[v] / a fine [av'ine]
g (+a, o, u)	[g] / gara [g'ara] 「駅」	無音 / a gara [a'ara]
ghj 南	[j] / ghjente [j'ente] 「ひとびと」	[j] / a ghjente [aj'ente]
gu	[gw] / guerra [gw'erra] 「戦争」	[w] / a guerra [aw'erra]
p	[p] / pace [p'adʒe] 「平和」	[b] / a pace [ab'adʒe]
qu	[kw] / quartu [kw'artu] 「4 分の 1」	[gw] / u quartu [ugw'artu]
s 南	[s] / sera [s'era] 「宵」	[z] / a sera [az'era]
t	[t] / terra [t'erra] 「大地、地球」	[d] / a terra [ad'erra]
v 南	[b] ([v]) / verit� [berid'a] 「真実」	[w] / a verit� [awerid'a]
z	[ts] / ziu [ts'iu] 「おじ」	[dz] / u ziu [udz'iu]

一覧のなかで、注意を要するものについて以下にのべる。上記で例となっている語形はいずれも北部のものである。南部では表中で 南 の記号のついた子音字のみが交替子音字であり、それ以外の子

音字に関してはつねに強形を用いるほか、南 のついた例でも実際の音はちがっている場合がある。たとえば、北部では b の強形と v の強形の区別がないが、南部ではそれらの区別があるので、verità [verit'a] となる。しかし、北部に [v] の音がないわけではなく、f の弱形としては使われる。

chj の強形 [c] は、硬口蓋に舌背をつけて破裂させる無声子音である。学校教育では [tj] による発音も許容されているが、その方式では chjamu [c'amu] 「わたしは呼ぶ」と ti amu [tj'amu] 「わたしはきみを愛する」が弁別できない。ghj の強形、chj の弱形 [ɟ] は硬口蓋に舌背をつけて破裂させる有声子音である。[dj] による発音も許容されているが、その方式では ghjalettu [jal'ettu] 「若鶏」と dialettu [djal'ettu] 「方言」が弁別できない。また、chj、ghj は語頭の弱形環境では弱形になるが、語中では強形のままにするのが原則である。ochju [ocu] 「目」、maghju [m'aju] 「5月」。なお、これら chj、ghj のつづり字、ならびに [c]、[ɟ] という音価は、コルシカ語を特徴づけるものと考えられており、Marchelli & Geronimi (1971) によって「イントリッチアーデ」(intricciate; 字義的には「入り組んだ文字」) と命名された。「インチャッカトーヂ」(inchjaccatoghji; 「圧縮された文字」) ともよばれる (Durand 2003, p.142)。

これに対し、一覧表にあらわれていない書記素、g (+e, i) [dʒ]、gh (+e, i) [g]、gn [ɲ]、gl (+i) [ʎ]、l [ʎ]、m [m]、n [n]、r [r]、sc (+e, i) [ʃ]、sg (+e, i) [ʒ]、および二重子音字 (bb, cc, dd, ff など) はいずれも交替しない。

また、単一の書記素でないため表 1 には入れなかったが、いわゆる muta cum liquida である br、gr についてもつぎの表 2 のような交替現象がみられる。これらのうち、br の弱化 (消滅) は北部にかぎられるのに対し、gr の弱化 (消滅) は全島の現象である。このため、表 1 とおなじ要領で、後者に 南 の記号をつけている。

表 2 : muta cum liquida における弱化

書記素 (grafemu)	強形 / 例 (名詞)	弱形 / 例 (定冠詞+名詞)
br	[br] / bracciu [br'attʃu] 「腕」	[r] / u bracciu [ur'attʃu]
gr 南	[gr] / granu [gr'anu] 「小麦」	[r] / u granu [ur'anu]

上記のような記述は、実用上の許容範囲のなかで、現象をおおまかに理解するためのものであり、実情としてははるかに多様な使用がなされている。たとえば、表 1 では強形 [d] に対応する弱形は「無音」としてあるが、実際には、pede 「足」を例とすれば、コルシカ島の諸方言には、[p'ede]、[p'eðe]、[p'e^δe]、[p'e^we]、[p'e^le]、[p'ee] のように、[d] と無音とのあいだに、あたかも連続体のように弱化のさまざまな中途段階がみられる。⁶⁾ 弱化の度合いは、おなじ町に住む話者のあいだでも、たとえば [p'eðe] ~ [p'e^δe] ~ [p'e^we] のようにいくらか幅があり、自由変異体を構成する異音をなしている。⁷⁾

4. 『新コルシカ言語地図』(NALC) をもちいた事例研究

本節では、言語地図をもちいて子音弱化の実情の一端を確認するとともに、若干の考察をくわえる

ことにする。使用する言語地図は、『新コルシカ言語地図』(Dalbera-Stefanaggi & Poli (dir.)(2007-2017): *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 略称 NALC) である。NALC はコルシカの言語地図として最新であり、過去最大規模 (350 地点、3500 問) の調査にもとづいて編纂されている。また、コルシカ大学のホームページの一角にある *La base de données langue corse* (略称 BDLC) で NALC のデータを検索できるという利点もある。以下では、子音体系のなかで相対的に「強い」順に、無声閉鎖子音、有声閉鎖子音、無声破擦子音、無声摩擦子音を基底とする例を取りあげる。

4.1. 無声閉鎖子音を基底とする例：i capelli の場合

無声閉鎖子音を基底とする例として、i capelli 「定冠詞+髪の毛 (複数)」(Dalbera-Stefanaggi & Muriel Poli (dir.) 2007, vol.1, p.44) を取りあげてみよう。capelli にふくまれるすべての子音が注目され、とくにはじめのふたつが弱化現象の対象となる。観察されるおもな方言形として、つぎのようなものがあげられる。以下の提示はおおむね北から南への順による。⁹⁾

1/ [ikab'elli] ⁹⁾ この形はコルシカ岬半島のサンタ・マリーア・ディ・ローダ (Santa Maria di Lota) で観察される。capelli の第2の子音が [b] へと弱化しているのに対して、語頭の子音は強形 [k] のままである。語中の母音間でおきる子音弱化と、(冠詞などの無強勢音節のあとで) 語頭子音におきる弱化で性質がことなり、由来もことなる。Dalbera-Stefanaggi (2001, pp.109-110) によると、西ロマンス語的な弱化は、語中の母音間でしかおきないのに対し、イタリア半島中南部 (周辺部トスカーナもふくむ) にみられる近代的な弱化 (文献的な証拠は 16 世紀から) は、語頭子音にもおきるという。したがって、[ikab'elli] は、リグーリア方言などの影響をうけた、西ロマンス語的な弱化であると考えられる。

2/ [igab'elli] に類する形 バスティーア (Bastia)、カルビ (Calvi)、コルティ (Corti)、オルメーダ (Olmata) など、コルシカ岬半島をふくむ北部にひろく分布し、コルシカ島全体でもっとも多くみられる形である。capelli のはじめのふたつの子音が子音交替によって弱形 [g]、[b] になっている。

3/ [ikap'elli] に類する形 この形式には、語彙的な基底形がそのままあらわれている (すなわち、いずれも強形である)。アヤッチュ (Aiacciu)、マリニャーナ (Marignana)、セリエーラ (Serriera) など、おもに中東部に分布している。

3 節でみたような南北二分法による一般的提示には、2/ と 3/ の形しか出てこない。このような記述には、人口的なヴォリューム・ゾーンをおさえている (とくに、南北 2 大都市であるアヤッチュ、バスティーアの類型をおさえている) という点で一定の利点はあるものの、実際におこなわれている変種の多様性をとらえるにはほど遠い。また、南北二分法では、アヤッチュは南部の中心ということになるが、さきにみた詳細な方言区分では、ターラヴ方言圏と中北部方言圏の境界に位置する推移的な形にすぎないことになる。もっと踏みこんでいうと、i capelli に関しては、[ikap'elli] という形をもちいるアヤッチュは、周囲を 5/ の [ikap'edi] に類する形をもちいる地点にとりかこまれているので、

一段北方的な形を用いる特異点であるともいえる。

4/ [ikkapp'elli] この場合のように、「弱い位置」にあるにもかかわらず、基底形以上に子音が強化されている事例がある。ここでは、基底形 /k/ が [kk] に、/p/ が [pp] へと強化されている。調査地点としては、ベッツァーニ (Vezzani) が該当する。ベッツァーニは弱化がおきる地域の周縁部にあたる (弱化がおきない地域に近い)。Dalbera-Stefanaggi (2002, p.112) によると、弱化がおきる地域をとりまくように「子音弱化に抵抗を示す地域」が散在し、近隣でおきている弱化に対する拒否反応があらわれているとのことである。[ikkapp'elli] における子音強化もその反応の一環であると考えられる。

5/ [ikap'edi] に類する形 サンタンドレーア・ドゥルチーナ (Sant'Andrea d'Urcinu)、ブグニャー (Bucugnà)、オーガナ (Ocana) など、中部の南西がわに見られる。語源的な -LL- を -dd- にするのは南部全般の特徴であるが、実際には [dd] ではなく [d] が出現している。Dalbera-Stefanaggi (2002, p.86-87) および同 (2015, pp.408-412) は子音の強弱の対立が解消されることをターラヴ方言圏の特徴であるとしているが、[ikap'edi] に類する形が分布している地域はターラヴ方言圏より北である。

6/ [igap'edi] に類する形 5/ のすぐ南、ソッチャ (Soccia)、グラナッチ (Granacci)、クツァーナ (Cuzzanu) など、ターラヴ方言圏にみられる。Dalbera-Stefanaggi (2002, p.112) はソッチャではむしろ語頭子音の「強化」がおきるといっているが、ここでは逆に、語頭子音のみが弱化している。¹⁰⁾

7/ [ikapiqdi] に類する形 マッダレーナ (Maddalena) 島をふくみ、ブニファーツィウ (Bunifaziu) をのぞくコルシカ・ガッルーラ方言圏に分布する形である。極南部に特徴的なそり舌音の [qd] があらわれている。

8/ [ikav'eli] この音はブニファーツィウ (Bunifaziu) のみで観察される。ブニファーツィウ方言は liguru bunifazincu とよばれるリグーリア的な方言の孤島を形成しているため、全般的に特異な形があらわれることが多い。[ikav'eli] という音は西ロマンス語的な弱化を反映している。西ロマンス語的な弱化は語中の母音間でしかなされず、語頭の子音は強形 [k] のままであることにも注目しよう。

ここで、1/ でみたサンタ・マリーア・ディ・ローダでの形、[ikab'elli] を思いおこそう。1/ のコルシカ岬半島と 8/ のブニファーツィウという、コルシカ島の南北両端に西ロマンス語的な弱化のみをことうった形がのこっており、イタリア半島中南部に由来する近代的な弱化が島の両端にはおよばなかったと考えられる。

4.2. 有声閉鎖子音を基底とする例：a donna の場合

つぎに、有声閉鎖子音を基底とする例として、a donna 「定冠詞+女」(Dalbera-Stefanaggi & Muriel Poli (dir.) 2007, vol.1, p.41) をとりあげてみよう。観察されるおもな方言形として、つぎのようなものがあげられる。以下の提示はおおむね北から南への順による。

1/ [aδ'onna] に類する形 ムルスィーリア (Mursiglia) ¹¹⁾、オルメータ (Olmata) などコルシカ岬半島か

ら、セルマーヌ (Sermanu)、ヴィワーリウ (Vivariu) など島の中部に掛けて点在する。/d/ が摩擦音化しており、弱化への一步をふみだした形であると見なすことができる。

2/ [ad'onna] に類する形 バスティアー (Bastia)、ルリアーヌ (Ruglianu) などコルシカ岬半島から、レンヌ (Rennu)、ギゾーニ (Ghisoni) などの中部に掛けて分布する。子音は基底形のままであり、弱化していない。コルシカ島の北端のコルシカ岬半島で実際に見られるのは、2/ か 1/ の形であるので、一般論として「北方ほど弱化がいちじるしい」といわれるのに反して、コルシカ岬半島はどちらかというとうと弱化をしない地域というべきである。

3/ [a^δ'onna]、[a^h'onna] に類する形 リーズラ (L'Isula)、コルシャ (Corscia) など北部、ベーナグ (Venacu)、アレーリア (Aleria) など中部に分布する。Aiacciu もこの形である。/d/ の弱化の第2段階ともいべき形であり、摩擦音化、または流音化した音がさらに副次的調音にまで弱められている。

ここで、4.1 節でもみたアヤッチュの特異性がふたたび注目される。アヤッチュでは a donna を [a^h'onna] としているが、その周辺ではおもに 1/ のタイプである [aδ'onna] に類する形がおこなわれている。つまりここでもまた、アヤッチュは一段北方的な形を用いている特異点なのである。その理由としては、アヤッチュという都市が、グラウオーナ川流域を後背地とする中心性をもち、中北部方言圏とつながっていることがあげられるであろう。

4/ [a'onna] に類する形 ガレーリア (Galeria)、パトリモーニウ (Patrimoniū) など北部から、コルティ (Corti)、リングイレツァ (Linguirezza) など中部に掛けてひろく分布する。/d/ の弱化がその極致に達し、完全に消滅している。弱化がもっとも進んだ地域であるといえる。

5/ [ad'onna] に類する形 アウッデー (Auddè)、ソッタ (Sotta) など、ターラヴ方言圏からコルシカ・ガッルーラ方言圏に分布する。地域が離れているので別扱いしたものの、いま問題としている子音だけをみると 2/ と同じく基底形のままであり、それゆえ 2/ とあわせるともっとも広く分布する形ということになる。

6/ [ad'onna] に類する形 スッダカロー (Suddacarò) などターラヴ方言圏、ならびにサルテー (Sartè)、ブニファーツイウ (Bunifaziū) などコルシカ・ガッルーラ方言圏に分布している。基底形にある -nn- を [n] にしているのは、ターラヴ方言圏に特徴的な子音の強弱の混同の一例であると考えられるが、donna の例に関しては、その混同がコルシカ・ガッルーラ方言圏にもひろがっている。

以上でみてきた a donna の方言的変異についてまとめると、北中部の弱化がおきる地域のなかでも、その態様は 1/、3/、4/ のようにさまざまである。一方、弱化がおきない地域 2/、5/、6/ がひろく存在するが、コルシカ岬半島、ターラヴ方言圏、コルシカ・ガッルーラ方言圏という、いずれも周辺的な地域であり、それらの地域には語頭に作用する近代的な弱化の影響がおよばなかったと考えられる。4.1 節でみた [ikkapp'elli] のような明確に弱化に抵抗を示した痕跡はみられないが、これは出発点となる基底形が有声閉鎖音という、無声閉鎖音より一段弱い音であったことが作用しているかもしれない。

4.3. 無声破擦子音を基底とする例：u celu の場合

つぎに、有声破擦子音を基底とする例として、u celu「定冠詞+空 (そら)」(Dalbera-Stefanaggi & Muriel Poli (dir.) 2007, vol.1, p.174) をとりあげてみよう。観察されるおもな方言形として、つぎのようなものがあげられる。以下の提示は北から南への順による。この事例では、おもな類型は北から南に輪切りのように分布している。

1/ [udʒ'elɐ] に類する形 ([udʒ'elɐ] をふくむ) コルシカ岬半島から中部にかけて分布し、おおむね ガレーリア (Galeria)、ベーナグ (Venacu)、リングイッツエータ (Linguizzeta) を通る線より北方にみられる。バスティーア (Bastia)、カルビ (Calvi)、コルティ (Corti) もこのなかにふくまれる。celu の語頭子音が有声化している。

2/ [utʃ'elɐ] に類する形 ([utʃ'elɐ] をふくむ) 中部を中心に、1/ で示した線より南方、アヤッチュ (Aiacciu)、チャマナッチャ (Ciamanaccia)、アレーリア (Aleria) を通る線より北方にみられる。アヤッチュ、グアーニュ (Guagnu)、サン・ロレンツ (San Lorenzu) など。celu の語頭子音が基底形のままだらわれている。

3/ [uttʃ'eli] に類する形 ベッツアーニ (Vezzani)、サンポール (Sampolu)、パッレーガ (Palleca)、キザー (Chisà) など、中部からターラヴ地方にかけて散在する。語頭子音はむしろ強化されており、弱化への抵抗を示している (cf. 4.2 節の 4/)。やはり弱化の起きる地域と起きない地域の境界近くに分布しており、「抵抗」仮説を裏づけている。

4/ [utʃ'eli] に類する形 2/ で示した線より南方、ターラヴ地方南部から、極南部 (ブニファーツィウを除く) にかけて分布する。プルプリアー (Pruprià)、サルテー (Sartè)、クウェンザ (Quenza) など。celu の語頭子音は基底形のままだらわれている。

5/ [uts'ɪa] リグーリア方言の孤島であるブニファーツィウでみられる形である。/ts/ がもちいられているものの、語頭子音の無声性は保たれている。

この事例は比較的南北二分法が通用するものの、パトリモーニウ (Patrimoniu) のようにかなり北方にも 2/ の形が分布しているなど、やはり二分法の過度な適用は不可能であることを示している。

4.4. 無声摩擦子音を基底とする例：u fornu の場合

つぎに、無節摩擦子音を基底とする例として、u fornu「定冠詞+かまど」(Dalbera-Stefanaggi & Muriel Poli (dir.) 2007, vol.1, p.108) をとりあげてみよう。fornu の語頭子音の帰趨がここで問うべき中心的問題である。観察されるおもな方言形として、つぎのようなものがあげられる。以下の提示もおおむね北から南への順による。

1/ [uv'ɔrnu] に類する形 コルシカ岬半島からヴィワリーウ (Vivariu)、アレーリア (Aleria) にかけて、島の 3 分の 2 を占めている。アヤッチュ (Aiacciu) もこの形であるが、周囲とはことなる (つまり、ア

ヤッチュでは一段北方的な形をもちいている)。語頭の *f* が *v* に有声化している。また、この有声化だけに注目するなら、その地理的なひろがりはさらに大きくなり、ほぼ全島にわたっておこなわれている (cf. 下記 3/、5/)。

2/ [uv'ɔnnu] に類する形 ここでの議論の本筋ではないが、*-m-* の *-n-* から *-r-* への逆行同化がおきている。ロツツイ (Lozzi)、マリニャーナ (Marignana)、ソッチャ (Soccia)、ベーナグ (Venacu) など、中部に散在している。

3/ [uv'ɔrru]、[uv'urru] に類する形 おなじく本筋ではないが、*-m-* の *-r-* から *-n-* への順行同化がおきている。2/ のすぐ南から極南部まで、ひろく分布している。ブグニャー (Bucugnà)、バステリーカ (Bastelica)、プルピアー (Prupia)、サルテー (Sartè) など。ただし極南部では強勢母音が *u* になる。

4/ [uββ'ɔrnu]、[uββ'urru] に類する形 *formu* の語頭子音が有声化し、唇歯音から両唇音に移行したうえに、二重子音化している。有声化という弱化現象と二重子音化という強化現象がともに起きているという点で興味深い。子音の強さの階梯では結果的に同等といえなくもないが、強化が弱化に対する拒否反応として起きたことを裏づけていると考えられる。アウッデー (Auddè)、サンポール (Sampolu)、ヴッテラ (Vuttera) などターラヴ地方のほか、カールビニ (Carbini)、ポルティウエチュ (Portivechju) など極南部にも点在する。ただし極南部では *-m-* が *-r-* になるほか、強勢母音が *u* になっている。

5/ [uf'urru] ブニファーツィウ (Bunifaziu) でみられる形である。*formu* の語頭子音が無声のまま保たれているのはブニファーツィウだけである。*f* の弱化 (有声化) は全島的な現象であるといつてよい。

なお、*f* の弱化が全島的な現象であるのと足並みをそろえて、他の摩擦子音、すなわち */s/*、*/v/* の弱化も全島的な現象であることを指摘しておきたい。

5. 考察とまとめ

すでに明らかなように、コルシカ語諸方言のあいだの差異を特徴づけると伝統的に考えられてきた南北二分法には、概略的な理解という一定の利点はあるにしても、現実の複雑さを説明できるものではなく、他のいくつかの要因を導入する必要がある。

ここで、コルシカ語の子音弱化に影響をあたえた現象であり、研究がよくすすんでいる、トスカーナ地方の子音弱化、いわゆる «gorgia toscana» を参照し、比較をおこなうことは有益であろう。

まず、gorgia toscana が、基本的に摩擦音化 (spirantizzazione) であるのに対して、コルシカ語の子音弱化は、なによりも有声化 (sonorizzazione) であるという対比を摘示できる。たとえば、gorgia toscana の代表的な例とされる *la casa* [lah'asa] と対応するコルティ (Corti) のコルシカ語は *a casa* [aɣ'aza] である。より一般的には、Lass (1984, p.178) の図式 (下記の図 1) ¹²⁾ にみるように、子音弱化には、図中で縦方向に示されている有声化と、横方向に示されている調音弛緩というふたつの方向がある。図 1

において、コルシカ語の子音弱化は可能なかぎり下方に向かうものであり、*gorgia toscana* は可能なかぎり右方向に向かうものである。

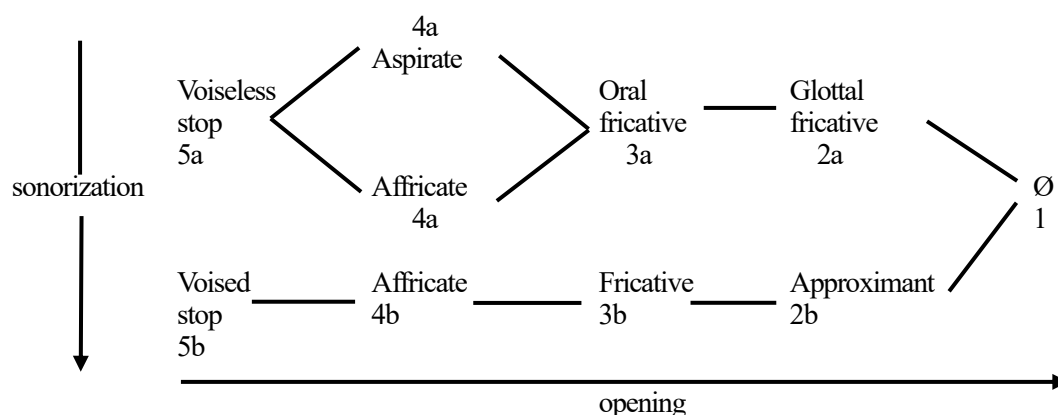


図1：子音弱化の一般的階梯 (Lass 1984, p.178)

つぎに、さきの点とも関連して、コルシカ語の子音弱化における有声閉鎖子音の帰趨に注目できる。なかでも、*/d/*、*/g/* の消滅というドラスティックな現象をどのように説明すればよいのであろうか。¹³⁾

この問いへの答えの要素は、Marotta (2008, p.250) がたてているつぎのような一般的傾向に見いだされる。すなわち、**(i)** 軟口蓋音は歯音や唇音より弱化しやすい、**(ii)** 唇音は歯音や軟口蓋音より弱化しづらい、というものである。とくに **(ii)** は、コルシカ語で */b/* が *[w]* になることはあっても消滅しないことと、*/d/*、*/g/* は消滅しうることの対比を説明できる。

しかしながらこの傾向では、3節でみた *muta cum liquida* の弱化・非弱化を説明できない。*muta cum liquida* では、*/gr/* が全島的に弱化するのに対し、*/br/* は北部でしか弱化しない。また、*/dr/* の弱化はきわめて例外的にしか存在しない。したがって、これらの弱化・非弱化については Marotta とは別の考え方をしなければならない。いまのところ、*/dr/* における */d/* と */r/* の調音点がいずれも歯茎・舌尖なので、連続的に調音しやすいために */dr/* がもっとも弱化をまぬがれやすくなったと考えているが、それだけでは部分的な説明にしかない。この問題については、今後ひきつづき考えてゆきたい。

註

¹⁾ Kirchner (2004, p.313)、Marotta (2008, p.239) でも、lenition が広義の用語であるむねの指摘がなされている。

²⁾ Dalbera-Stefanaggi (2001, pp.217-219) および Dalbera-Stefanaggi (2002, pp.12-13) を参照。

³⁾ IPA の通則には反するが、本論文では『新コルシカ言語地図』や Culioli et alii (2009) (2010) (2012) などのコルシカ語辞典で広くおこなわれている慣習にならって、強勢記号 ' を強勢音節の直前ではなく、強勢母音の直前にする。

⁴⁾ 単一の標準語が存在せず、多数の方言に対等の規範性をあたえる言語。Marcellesi (1984) による概念。

⁵⁾ Gaggioli (2012) のような規範文法、Papi (2017) のような学校文法でも同様の記述がなされている。

⁶⁾ Dalbera-Stefanaggi (2002, p.33) を参照。

⁷⁾ 木村 (2022) は、スペイン語における有声閉鎖音素 */b/*、*/d/*、*/g/* について、閉鎖音、摩擦音、接近音のすべての異音が（程度の差こそあれ）許容されることを示しており、コルシカ語の子音交替の連続性との類似が感じられる。

- ⁸⁾ 紙幅の都合で、地図形式で分布を示すことはできなかった。当面、NALC または BDLC を参照されたい。
- ⁹⁾ NALC では二重子音を [c] のようにマクロンで表記しているが、ここでは本稿のなかでの一貫性のため、[cc] のように表記することとする。
- ¹⁰⁾ BDLC に登録されている Soccia の方言形 444 例のうち、[igap'ɛdi] のように、「語中にある弱化が期待される子音が弱化しておらず、語頭のみ弱化している」という例はほかには皆無である。したがって、当の Soccia においても [igap'ɛdi] という例は特異であり、体系的な説明に回収しがたい。
- ¹¹⁾ ムルスィーリアでは、a donna をのぞき、定冠詞が li capelli, lu celu, lu fornu のように l- のついた形であったが、今回注目している現象ではないので問わない。
- ¹²⁾ 図 1 の 4a にある有気閉鎖音については、ことなる位置づけをする議論もある。Marotta (2008, p.258) は、子音の強度の階梯において、有気閉鎖音を無気閉鎖音の上位にしている。
- ¹³⁾ Marotta (2005, p.259) は «[...] the basic cue for the perception of these phones could be silence: a very short interruption of the phonetic string, even a few msec, is enough to give the listener the perception of constriction, namely of occlusion. [...] stops are no more than sounds of silence » といっており、閉鎖子音の消滅を説明する際に見魅力的な考えかたであるが、コルシカ語では閉鎖子音全般が消滅の候補になるわけではないので、本稿では採用できない。

参考文献

- Brandão de Carvalho, Joaquim (2008) : « Western Romance », Brandão de Carvalho, Joaquim et alii (Eds.) : *Lenition and Fortition*, Mouton de Gruyter, pp.207-233.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2009) : *U Maiò : Dictionnaire français-corse*, D.C.L.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2010) : *U Minò : Petit dictionnaire français-corse, corsu-francese*, D.C.L.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2012) : *U Maiori : Dizziunariu corsu-francese*, D.C.L.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2001) : *Essais de langue corse*, Piazzola.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2002) : *La langue corse*, P.U.F. (訳書 : 渡邊淳也訳 (2020) : 『コルシカ語』白水社)
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2007) : « From the Linguistic Atlases to the Database, and vice versa », Yuji Kawaguchi et alii (Eds.) *Corpus-Based Perspectives in Linguistics*, John Benjamins, pp.55-65.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José & Muriel Poli (dir.) (2007-2017) : *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 4 vols., Éditions du CTHS.
- Durand, Olivier (2003) : *La lingua corsa*, Paideia.
- Gaggioli, Ghjaseppiu (2012) : *La langue corse en 23 lettres*, Albiana.
- 長谷川秀樹 (2003) : 「コルシカ語の音韻的特性について」『ロマンス語研究』36, pp.57-66.
- 木村琢也 (2022) : 「スペイン語の子音音素 /b/, /d/, /g/, /y/, /w/ の異音について」『清泉女子大学紀要』69, pp.55-66.
- Kirchner, Robert (2004) : « Consonant lenition », Bruce Hayes et alii (Eds.) *Phonetically based Phonology*, Cambridge University Press.
- 小林標 (2019) : 『ロマンスという言語』大阪公立大学共同出版会.
- Lass, Roger (1984) : *Phonology*, Cambridge University Press.
- Marchelli, Pascal & Geronimi, Dominique Antoine (1971) : *Intricate è cambiarine*, Beaulieu.
- Marcellesi, Jean-Baptiste (1984) : « La définition des langues en domaine roman », *Actes du Congrès de Linguistique et de Philologie Romanes*, 5, Université de Provence, pp.307-314.
- Marotta, Giovanna (2008) : « Lenition in Tuscan Italian », Brandão de Carvalho, Joaquim et alii (Eds.) : *Lenition and Fortition*, Mouton de Gruyter, pp.235-271.
- Papi, Ernestu (2017) : *Grammatica pratica di a lingua corsa*, Clémentine.
- 菅田茂昭 (2014) : 『コルシカ語基礎語彙集』大学書林.
- 菅田茂昭 (2019) : 『ロマンス言語学概論』早稲田大学出版部.
- Thiers, Ghjacumu et alii (1984 / 2014) : *u Muntese : Dizziunariu corsu-francese*, Albiana.
- Villafañe, Christina (2006) : *Consonant weakening in Florentine Italian*, Ph. D. Dissertation, Georgetown University.
- Villafañe, Christina (2008) : « Consonant weakening in Florentine Italian », *Language Variation and Change*, 20, 2, pp.275-316.
- 渡邊淳也 (2017) : 『コルシカ語基本文法』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2019) : 「ことば紀行 (40) コルシカ語」『パブリッシャーズ・レビュー : 白水社の本棚』79, p.6.
- 渡邊淳也 (2020) : 「コルシカ語方言学の諸問題」『言語・情報・テキスト』東京大学, 27, pp.117-130.
- 渡邊淳也 (2021) : 「コルシカ語諸方言における母音変化について」『言語・情報・テキスト』東京大学, 28, pp.55-60.